



Title	＜翻訳＞ハズラト・マウラーナー・マダニー
Author(s)	プラバーカル, カナイヤーラール ミシュラ; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2025, 23, p. 55-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハズラト・マウラーナー・マダニー

カナイヤールール・ミシュラ・プラバーカル 著

長崎 広子 訳・註

[解題]

本稿は、ガーンディー主義者で国民会議派の党员であった作家カナイヤール・ミシュラ・プラバーカル（कन्हैयालाल मिश्र 'प्रभाकर' 1906-1995）¹が自ら主導した反英運動におけるマウラーナー・フセイン・アフマド・マダニー（मौलाना हुसैन अहमद मदनी 1879-1957）の功績と彼の人となりを描いたヒンディー語随筆の日本語訳である。

1947年8月15日のインドとパキスタンの分離独立から、まもなく80年を迎える。モーディー政権下で経済成長がめざましいインドは国際的な存在感を高める一方で、国内ではヒンドゥー至上主義の拡大により、ムスリムとのコミューナル対立が深刻化していると報じられている。かつてムハンマド・アリー・ジンナーの指導のもとにパキスタンがイスラーム国家としてインドと分離独立した歴史は、両宗教の共存の難しさを印象づけるが、反英運動を担った人々のなかには互いに協力して信頼関係を築いた者たちもいた。本稿で描かれているフサイン・アフマド・マダニーは、全インド・ウラマー協会を率いたイスラーム学者であり、デーオバンド派として知られるダールル・ウルーム・デーオバンド神学校²で学び、その校長を務め、またインドの独立運動に多大な貢献を残した人物である。ジンナーがインドの分割とムスリム国家の建設を目指してパキスタン建国の父となったのに対し、マダニーは統一インドの実現を目指し、国民会議派に協力した。

1914年に第一次世界大戦が始まると、トルコのヒラーファト（カリフ制）擁護とムスリムの国際的軍事連帯にむけた反英運動で、デーオバンド派のウラマーであるマフムードウル・ハサンに協力し、マダニーはメッカ

¹ カナイヤール・ミシュラ・プラバーカルは、インド独立運動の活動家であり、作家である。インドの分離独立後は自らの文学活動が政治という枠にとらわれることを避けるために会議派を離党している。彼の略歴と作品については、拙稿（長崎 1993: 56）を参照。

² デーオバンド派については宮原（2009）を参照。

で捕らえられて英領マルタで 1916 年から 1920 年まで収監されている(「絹の手紙」陰謀事件)³。1920 年代には、インド国民会議派とヒラーファト運動の協力関係を築く上で重要な役割を果たし、イスラームのウラマー(イスラーム学者)が独立運動に参加する基盤を作った。

地域性に基づくナショナリズムを推進しようとするマダニーとそれをイスラームの普遍性の理念に対立するものと批判するイクバルとの対立はよく知られるところである⁴。マダニーは著書 *Muttahida Qaumiyyat aur Islam* (1938 年)⁵で、インドの統一を支持し分割に反対する立場を明確に表明している。統一インドを目指す彼の考え方にはガンディーの思想と共鳴する部分もあったが、一方でジンナーやその支持者たちからは強い反発を受けていたことが本随筆中に描かれている。

宗教的指導と社会的貢献が評価されて、マダニーは 1954 年にインド政府からパドマ・ブーシャン賞を授与された⁶。

この随筆の著者カナイヤール・ミシュラ・プラバーカルは、イギリス植民地時代のインドで、マハートマー・ガンディーの率いた独立運動

³ रेशमी रूमाल आन्दोलन (Silk Letter Movement)。トルコのカリフ制を擁護し、ドイツ・トルコ・インドの反英戦線結成のための、マフムドゥル・ハサンを中心とするデーオバンド派ウラマーの運動。加賀谷と浜口 (1977: 99-100)参照。

なお、この運動はインド独立運動への貢献を称えられ、2013 年にインド郵便によって記念切手が発行された。

⁴ イクバルのマダニー批判は、Metcalf (2009: 112-113)を参照。祖国に関するイクバルの詩に彼の思想が描き出されており、日本語訳がある。松村耕光 2021.「詩集『鈴の音』(1)－イクバルのウルドゥー詩(14)」『イスラーム世界研究』第 14 号, pp. 345-346.

⁵ Husain Ahmad Madni, 1937. *Muttahida Qaumiyyat aur Islam*, Nayi Dilhi: Qaumī Iktā Trust. 英訳: Madani, Maulana Hussain Ahmad. 2005. *Composite Nationalism and Islam*, New Delhi: Manohar.

⁶ Padma Awards Ministry of Home Affairs (Govern. Of India)
<https://dashboard-padmaawards.gov.in/?Award=Padma%20Bhushan&Year=1954-1954> (2024 年 11 月 7 日アクセス)

に身を投じた名もなき人々を数多く描いてきた。その彼が、歴史的に著名なフサイン・アフマド・マダニーを取り上げたこの随筆は、研究書では得られない貴重な資料である。この作品と時代背景について補足するとすれば、ガーンディーの主導した第1次サティヤグラハ運動（1919-22年）はインド・ムスリムのヒラーファト運動⁷と連携したが、本随筆に書かれた第2次サティヤグラハ運動（1930-34年）のころはムスリムとヒンドゥーの対立が濃厚になっていた時期である。ウッタール・プラデーシュ州の小都市デーオバンドでミシュラが主導し義勇隊員たちが繰り広げた外国衣料の不買運動にマダニーが協力するに至った過程とその運動の成功による高揚感は、本作品のクライマックスである。国民会議派に協力したウラマー指導者として知られるマダニーがヒンドゥー側からいかなる人物として見られていたかをこの随筆はよく伝えている。

ムスリムのなかには義勇隊員に対して好戦的な態度を示す者もいた一方で、マダニーのムスリムたちへの強い影響力と、その清貧で高尚な生きざまがムスリムたちの反発をも抑え込み、それはヒンドゥー教徒から尊敬をもって称えられている。マダニーの目指した統一インドへの理念は本稿では明確に語られていないが、ミシュラは彼を人格者であり苦行者であるとして絶賛し、彼の苦難のときには心を痛み、ふたりの築いた信頼関係から、両者の目指すものと価値観は共有されていたことが伺える。

随筆には、当時のヒンドゥーとムスリムの対立について明確に記されていない。しかし両宗教間の緊張は当然あったわけで、それが婉曲的に語られているのが、モスク前での楽器の演奏についてふたりが議論を交わすシーンである。モスクの前でヒンドゥーが宗教儀礼で楽器を演奏することによる衝突は以前からあり、随筆では具体的な事件を指しているのか、一般

⁷ 第1次世界大戦にカリフを戴く国トルコが参戦したことをきっかけとする、インド・ムスリムによる反英運動。この運動は国民会議派との同盟を生み、ヒンドゥーとムスリムが共闘して反英の非協力運動へと発展する。その後ガーンディーが1922年にゴーラクプル県チャウリーチャウラー村での武装蜂起を理由に非協力運動を停止したことで、運動の挫折は両宗教間の敵対を劇化させることになったという（加賀谷 浜口 1977: 96-107）。

論として言っているのかは分からない。また、本文から、これはムスリムの一方的な被害にミシュラが心を痛めているように読めるが、この段落の冒頭の「宗教対立による恐怖の時代」から、特にバクル・イードでのムスリムによる牛の屠殺に反対するヒンドゥー教徒に対して、モスク前の楽器の演奏をやめるようにムスリムが求めた牝牛保護運動関連の対立を指すものと推察される。楽器の演奏について意見を求められると、マダニーは無知のなせることと歯牙にもかけない様子であり、ミシュラも牛の屠殺やヒンドゥー側の被害についていっさい触れておらず、互いの宗教に配慮した婉曲的な表現になっている。この行間から読み取れるのは、当時の両宗教間の緊張関係とそれを俯瞰するマダニーという存在がヒンドゥー側にとっていかに重要であったかという点である。

本稿が、ヒンディー文学としてだけでなく、インド独立運動の担い手たちの歴史に触れる機会になれば、幸いである。

謝辞：本稿の翻訳と解説にあたって、松村耕光氏、宮本隆史氏、桑島昭氏、虫賀幹華氏、山根聡氏からご教示をいただいた。ウルドゥー文学者の松村耕光氏からは、人名や語彙の表記について丁寧なご助言をいただき、それを反映して翻訳の語彙を選んだ。宮本隆史氏からは、モスク前の音楽の演奏について研究書やガーンディーやアンベードカルの記述を一覧にまとめてご提示いただいた。恩師である桑島昭氏は 1946 年のシムラー会議に関する情報をご提示くださった。虫賀幹華氏と山根聡氏は内容理解に関する質問に答えてくださり、的確な知見をくださった。この場を借りて深くお礼申し上げます。

※ 本稿でのムスリムの人名のカタカナ表記は、デーヴァナーガリー文字による発音に一部準拠しないものがある。たとえば、हुसैन अहमद मदनी は、デーヴァナーガリー文字に従えばマドニーであるが、インドで発行された記念切手には Husain Ahmad Madani と記されており、これは研究

書などでも用いられる一般的な発音表記である。そのため、マダニーを採用した。

※ 本翻訳部分での（）は、訳者によって付した本文注である。

使用テキスト

कन्हैयालाल मिश्र ‘प्रभाकर’ 1959. “हज़रत मौलाना मदनी”, दीप जले शंख बजे, काशी: भारतीय ज्ञानपीठ, pp. 41-51.

参考文献

Azad, Maulana Abul Kalam. 1959. *India Wins Freedom*, Bombay: Orient Longmans.

Gandhi, M. K. 1994. *Gandhi and Communal Problems*, Mumbai: Center for Study of Society and Secularism.

(https://www.mk gandhi.org/g_communal/gandhiandcommunalproblems.php)

Ḥusain Aḥmad Madnī, 1937. *Muttahida Qaumīyyat aur Islam*, Nayī Dīlḥī: Qaumī Iktā Trust.

Madani, Maulana Hussain Ahmad. tr. Mohammad Anwer Hussain and Hasan Imam. 2005. *Composite Nationalism and Islam*, New Delhi: Manohar.

Metcalf, Barbara D. 2009. *Husain Ahmad Madani – The Jihad for Islam and India’s Freedom*, Oxford: Oneworld Publications.

Moon, Vasant, ed., 2014. *Dr. Babasaheb Ambedkar: Writings and Speeches*, vol. 8, New Delhi: Dr. Ambedkar Foundation.

(https://mea.gov.in/Images/attach/amb/Volume_08.pdf)

Sarkar, Sumit. 1989. *Modern India 1885-1947*, 2nd edition. London: Macmillan.

加賀谷寛 浜口恒夫 1977 『南アジア現代史 II』 山川出版社。

長崎広子 1993 「夕べの燈、夜明けの法螺の音」『印度民俗研究』第 8 号,
pp. 21-56.

宮原辰雄 2003 「デーオバンド派とターリバーン—南アジアにおけるデー
ーオバンド派の流れ」『北陸法學』第 10 卷第 3・4 号, pp. 85-109.

ハズラト・マウラーナー・マダニー

シャイフル・ヒンド
インドの長老であるマウラーナー・フサイン・アフマド・マダニーは歴史に名を刻まれた人物である。ハディース——イスラームのダルマ・シャーストラ法典⁸——の世界的に著名な学者であり、またインド最大のムスリム教育機関であるダールル・ウルーム・デーオバンド⁹の校長であった。彼は生きながらにして殉教者のようであり、人を導くサント聖者であり、一言で言うと偉大な人格者であった。高尚な人物でありながら、その生涯における人となりはとても穏やかで美しく、そばに座ると、莫座の上ではなく、彼に抱かれているかのように感じられた。ああ、なんて優しく、なんて愛らしく、なんて善良で、なんて素朴な人であったことだろう。

この人は誰なのか？ 走りさる馬車に座るひとりの老人。馬車が店の前を通ると、店主が立ちあがって彼に敬礼をする。こうして馬車は走りつづけ、人々は立ちあがって敬礼をしつづける。それに対して彼は全く偉ぶることなく、すべての人に愛と敬意を込めて挨拶を返した。この人は誰なのか？ 彼の前で頭を垂れると、今まさに善行を積んだかのように、多くの人々が幸福感に浸る。これこそがマダニー師、すべての人にとって身内のような存在であった。

ここで、言っておこう。すでに亡くなったこのマダニー師¹⁰は宿命を担ったひとりの人間であった。この世は人間で埋め尽くされているが、彼の

⁸ ハディースはムハンマドの言行録であるが、著者はヒンドゥー教の語彙を使ってイスラームのダルマ・シャーストラ（法典）と述べている。

⁹ デーオバンドに 1866 年に創設されたイスラーム教育機関。インド国内にとどまらず世界的に著名な同校は、デーオバンド派として知られ、ひとつのインドを目指しインド独立運動に参加した。

¹⁰ イスラーム法学を修め通じている学者ウラマーは、マウラーナー・マウラヴィーとよばれ地域社会の指導者であったという（加賀谷 浜口 1977: 35）。本文では尊敬と親しみをこめて用いられているマウラーナー・マダニーをマダニー師と訳した。

場所は今空いており、永久に空席のままであろうことは歴史的事実である。それを埋めることのできる者はいない。

1930 年の運動¹¹は勢いを増しはじめ、各地で外国製の衣料に対するピケ¹²が始まっていた。盟友である故アーナンド・プラカーシュは、デーオバンドでも外国製衣料に対するピケを始めるべきだと焦っていたが、我々は酒のピケさえもうまく実行できず、時には一日中、マームチャンド・ジャインがひとりでそこに立っていなければならなかった。飢えと渇きで顔はげっそりやつれ、足は重くなっていたが、その不動の信念の力によって彼は立ちつづけた。なぜなら、彼を励ますための義勇隊員さえほかにひとりもいなかったからである。しかも、酒屋は一軒しかなかったが、衣料品店は商店街にあふれてかえっていた。

ピケには 80 人の義勇隊員が必要であった。彼らを動員する役目を私が引き受け、村々で集会を何度も開いた。数日間で 80 人の義勇隊員が集まった。サティヤーグラハ・アーシュラム¹³に彼らを配置し、どのようにして店の前に立ちつづけ、どのようにして客と話し、客が言うことを聞かないときにどのようにして店の前で横たわるかを訓練した。また、警棒が行使されたときにどのようにしてそれに耐えるか、逮捕されたときにどのようにして連行されるかも訓練した。

¹¹ ガーンディーが指導した第 2 次非暴力・不服従運動。サティヤーグラハ運動ともよばれる。ちなみに、第 2 次非暴力・不服従運動では特に「塩の行進」が有名である。

¹² 労働争議。独立運動のひとつとして行われたもので、そこでは市場や店舗の前に立ち、海外の衣料や酒を購入しないように呼び掛けていた。

¹³ サティヤーグラハ・アーシュラムはガーンディーの非暴力抵抗運動（サティヤーグラハ）を実践するための共同体や施設であり、ガーンディー自身が設立したグジャラートやマハーラーシュトラにあるアーシュラムが有名である。デーオバンドにその名のアーシュラムがあったことは確認できないが、その理念をもとに何らかのアーシュラムがあったものと推測される。

第一日目は義勇隊員がパトロールをする——店の前には立たずに市場を巡回して外国製品に反対するスローガンを叫ぶ、第二日目から正式にピケを張ることが決まった。私は、デモ行進をしながら義勇隊員に市場を巡回させ、彼らをグループに分けて歩かせた。あたりは熱気を帯び、衣料品商たちの心を動かすほどスローガンを叫んだが、夕方になって状況は一変した。

「^{バンディット}先生さん！ わしはムスリムの衣料品商の店でピケはしません」

このわしは実のところ我々であった、というのも全員が同じことを言っていたからだ。

「なぜ、どうしたのですか？」

「わしらは死ぬつもりはありません」

徐々にことのしだいが明らかになった。小柄なムスリム商人がいて、本名は神のみぞ知るが、皆は彼を“小鳥の衣料品商”と呼んでいた。昼間、店の前を誰か義勇隊員が通ると、「よう兄さんよ、息子よ」と呼んで店に招き入れ、彼は鋭く光るナイフを見せた。「おい兄さん、明日、ムスリムの衣料品商の店の前で義勇隊員が立つなら、どこだってそいつの腹にこのナイフを突き刺してやる。イギリスの行政官は、誰も逮捕しないし裁判もしないと言っている。お前さんをいい奴だと見込んで教えてやっているんだ。他のどこに立ってもいいが、ムスリムの店の前で^{デューティー}お勤めはするな」

口々に噂が飛び交った。すべての義勇隊員にこの話は広まり、村から来た純朴で無学な若者はおびえ、この恐怖は夜になって我々の前に突き付けられた。

「^{バンディット}先生さん、わしはムスリムの衣料品商の店でピケはしません」

80人もの男たちが「明日からピケが始まり、いかなる布も販売されないだろう」と一日中市場で大声をあげて宣言したのに、この状況でどうすればピケを張れるだろうか。もつれた事態を、どうやって解決しようか？

夜の10時に私はマダニー師の家に行った。彼は数人と一緒に座って話をしていて。私が用件を告げると、彼は深刻な表情になった。ジャウル・グル氏もそこに座っていて言った——「ムスリムの店でピケを張るのはやめろ。俺は今日デリーから来たが、そこでもそうだった」。

マダニー師がこちらを見たので、私は言った——「それはできません。でもよろしければ、明日『ピケはマダニー師が主導した』と宣言いたします。その後の仕事は私が引き受けますが、名義と命令はあなたのものになります」。

これには誰も同意せず、問題は解消されなかった。堪えきれずに私は言った——「では、どういう方法がありますか、ハズラトさん？」。

マダニー師は言った——「あなたがおっしゃってください、解決策を。私はあなたのボランティア（義勇隊員）ですから」。そのとき何が起こったのか、思わず口をついて出た。「困るのは、あなたが公然と嘘をつくことです！」

言うことを言っただけだが、事の重大さに目をあげることができなかった。そのときジャウル・グル氏のいかつい手が私の喉を絞めあげた。そして獅子のような声で怒鳴った——「愚か者が、痛い目に合わせてやる！」。

マダニー師の目に怒りが浮かぶと、ジャウル・グルは手を離した。私は身を縮めてマダニー師の方を見ると、彼は手を合わせていた。思わず私は彼の足下に手を伸ばした¹⁴。マダニー師は言った——「ジャウル・グル ^{サーハブ} 旦那の発言は私に免じて許してください。私があなたのボランティアであることを信じてください」。

立ち上がりながら私はジャウル・グルに仕返しをするかのようにマダニー師に言った——「いいですか、私が言うことをしなければなりませんよ。なぜならあなたはボランティアなのですから」。

彼は言った——「もちろんです。でもボランティアの身体に見合う重さのものにしてください」。

全員がどっと笑った。私は帰った。今や成功は手に入れたも同然であった。次の日 80 人の ^{ボランティア} 義勇隊員 とともに私はデモを組織し、大声で宣言した——「友である何人かの衣料品商は我々 ^{ボランティア} 義勇隊員 にナイフを見せて殺すと脅しました。そのため国民会議派はピケに全力を注ぐことを決定しました。明日か明後日、ピケを張ることになるでしょう。それには ^{シャイフル・ヒンド} インドの長老・

¹⁴ 足に触れるという行為は、ヒンドゥー教徒による敬意の表現。

マウラーナー・フサイン・アフマド・マダニーと、ほかの選ばれた人々も参加します。ナイフを持つ友人たちは、刃を研いで覚悟しておくよう、よろしく願い申し上げます」

宣言の誇らしい目的にスローガンの重い響きが重なり、殉教詩人オームプラカーシュの詩が響き渡った——見てやろう、殺人者の腕にいかなる力があるかを——¹⁵。人々の身体は歓喜に震え、街全体に一種の興奮が広がった。我々義勇隊員は胸を張り、市民は我々に共感し、衣料品商たちの力は揺らぎ、四方八方で人々が小鳥の旦那を罵倒しはじめた。これは我々の運動の成功であったが、実のところ私にとっては運動というよりも賭けであった。それが功を奏したのは、約2時間半後、市議会議長のハーン・バハードウル・シェイフ・ズィヤーウルハックが慌てた様子で私の家に来て、こう言ったときであった——「あなたは私をこの町から追い出すつもりですか？」。

私は丁重に答えた。「地域の王はあなたです。私は無力な男です。なのにこのようなことをなぜおっしゃるのですか？」

むっとして彼は言った——「インド^{シャイフル・ヒンド}の長老をあなたが市場に立たせるなら、私の尊厳など鏹銭にすぎない」。

私はさらに丁重に言った——「ならば、ピケのためにあなたのお名前を貸してください。彼の名は削除しますので」。

¹⁵ ビスミル・アズィーマーバーディー (Muhammad Hasan Bismil Azīmābādī 1901 - 1978) の詩「سرفروشی کی تمنا 身命を賭す願い」のなかのフレーズがデーヴァナーガリー文字で“देखना है जोर कितना बाजू-ए-क़तिल में है”と記されている。この詩は、同じビスミルのため、誤ってラーム・プラサード・ビスミル (1897-1927) の作品と混同されることもあるが、本文ではオームプラカーシュという殉教詩人の作とされている。ラーム・プラサードの誤記か？

क़तिलは殺人者を意味するが、松村耕光氏によれば、ウルドゥーのガザルでは佳人を指すこともあるという。このテキストの文脈では、インド人を殺して抑圧するイギリス帝国主義者に対し、「殺せるものなら殺してみろ」と挑発的なメッセージを伝えている。

最終的に、私は三日後にピケを開始する、ハーン・バハードゥルは衣料品商たちに国民会議派の方針を自主的に認めるように働きかけることが決まった。夜に彼はムスリムの商人たちの会合を開いた。^{シャイフル・ヒンド}インドの長老が市場にきて立つと思うとムスリムたちはすでに狼狽していたので、ハーン・バハードゥルの提案をすぐさま受け入れた。次の日の 12 時までには我々義勇隊員は彼らの外国製の布を束にまとめ、その上に国民会議派の判を押した。次にヒンドゥーの衣料品商のところに向かい、夕方までに彼らも要求を受け入れた。

その後我々は再びデモ行進をした。昨日のデモには興奮があった。今日のデモには喜びが溢れていた。昨日は何十ものスローガンを叫んだが、今日はたったひとつであった——「^{シャイフル・ヒンド}インドの長老・マウラーナー・フサイン・アフマド・サーハブ・マダニー、万歳！」。

デモ隊が家の前に到着すると、彼は外に姿を現わした。義勇隊員が花環をかけ、私が足に触れると、彼は言った——「私は何かしましたか？」。私は答えた——「では、誰がしたのですか？」。そして我々全員が笑った。

ほかのところで、彼ほどの大物と私のような小物とのあいだで——これほどの差のあるなかで——この出来事が起こっていたなら、関係は確実に悪くなっていただろう。しかし彼はその後さらに優しくなった。実のところ、彼は内も外も優しくて、本当にいい人で、親切であることに彼が努力する必要はなかった。

そう、彼は柔和な人でありながら、岩が恥じるほど硬い人でもあった。だからこそ彼は自身の政治的な活動において殉教者として生きることができたのだ。しかし私はそれを語るのではなく、彼の日常の暮らしの話をしたいと思う。彼と話していたある日のことであった。屈んでそっと耳元で何か言わなければならなかったときに私は彼の枕のうえに両肘をついた。ほんの 2、3 分そうしていただけたが、離すと肘が痺れていた。これはその枕のせいであった。分厚い革を巻いたその枕の硬さには石でも敵うまい。どの指で押そうとも、まったくへこまなかった。石に弾力があるのか？

私の愚かさにはたっては笑止千万である——「ハズラトさん、あなたはこの上にどうやって頭をのせるのですか？明日柔らかい枕を持ってきました

ようか、あなたのために？」。

少し真剣な表情になって、彼は言った——「どうかお気遣いなく。ここにはこれがちょうどいいのです」。

私が食い下がると、静かに語った——「人生はままならないもので、いつイギリス人に召喚されるか分かりません。そうしたら奴らは自宅に置くのではなく、監獄に入れるのです。そこに枕があるかどうか。でも頭を高くするレンガならあるでしょう」。そしてゆっくり立ちあがって自分の布団を見せた。敷物とシーツの上に一枚の分厚いごわごわの黒い毛布が敷かれていた。彼は言った——「この上で寝ています。これは監獄にもありますから」。

それを聞くと、私の血は凍りついたようになった。1932年の投獄で数日間私も毛布の上で寝て頭の下にレンガを置いた。どれほど苦労して日々を過ごしたことか、なのにこの人はどれほど深い清貧の心を持っているのだろう。その身は自宅にあっても心は常に監獄にとどまっている。ああ、なんという修行者なのだろう！

彼の家は客のための ^{ダラムシャーラー} 宿泊所 であった。その敷物の上で一度に三十五人もの人々がお茶を飲んでいるのを見たことがある。家に誰も客がいらないようなことは人生でおそらく一日もなかっただろう。最初のころは、私は彼の家でお茶を飲まず、額に白檀の印をいつも付けていた。彼の親戚のカーリー・サーハブ¹⁶はこれを浄不浄を守っているからだと考えて私をいつもからかった——「バラモンさま、お茶を飲んでくださいよ」。ある日彼はマダニー師のいる前で強い口調で言った——「ちょっと、バラモンさま、飲まないのですか？」。

マダニー師が厳しい目で彼を睨みつけたので、私は言った——「ハズラトさん、この方は私の白檀を見て思っているのです、私がここのお茶を飲めば、ヒンドゥーの聖紐が切れてしまうと。でも私の聖紐はとても頑丈なので、これを粉にして丸めたとしても、びくともしません。本当の理由は、

¹⁶ カーリー・サーハブには読誦者の意味があり、役職を指す可能性はあるが、詳細は不明のため、人名として訳出した。

私は肉を食べませんが、ここでは肉が料理されているからなのです」。

彼は何も言わず、次の日に訪れると、私のお茶はグラスに入れて出された。私のためにいくつかの食器が新たに買い足され、特別な指示が与えられたことを知った¹⁷。彼は他人のためにどれほど気を配っていたことだろう。それなのに自分に対しては？

マウラーナー・マフムードゥル・ハサン¹⁸とともにマダニー師もメッカにいたころのことである。二人はインドで大きな革命を起こそうと執念を燃やしていたが、その時点ではマダニー師はイギリスから邪魔者として警戒されていなかった。メッカの支配者であるシャリーフ・フサインは弱体化しており、イギリスの操り人形でもあった。マウラーナー・マフムードゥル・ハサンを逮捕してイギリスに引き渡そうとしていたが、その情報がマウラーナーの仲間に伝わり、彼を秘密の場所に置いた。これは、第一次世界大戦が最高潮に達してイギリスが焦っていたころのことであった。

彼の所在を突き止めるために、マダニー師は逮捕され、さまざまな拷問を加えられたが、口を割らず、その顔に浮かぶ誠実さが歪むことすらまっとなかった。その後偉大なるマウラーナー・マフムードゥル・ハサン¹⁹

¹⁷ 厳格な菜食主義者のヒンドゥー教徒は、一度でも肉食をのせたことのある皿で提供された食事を食べない。肉を調理するムスリムの家で、ほかの者たちも使用するカップでお茶を飲むことをミシュラは嫌がったため、彼専用の食器が買い揃えられた。

¹⁸ Maulānā Maḥmūdulhasan (1851–1920)。Mahmud Hasan Deobandi や称号の Shaykh al-Hind とアルファベット表記されることもある。インド独立運動の初期に重要な役割を果たしたイスラーム学者であり、デーオバンド派の指導者。オスマントルコやアフガニスタンからの支援を受けてイギリスからインドを解放させるためにシルクに書かれた秘密文書のやり取りを行い(「絹の手紙」陰謀事件)、1916 年に逮捕され、マルタ島に流刑になった。1920 年に釈放され、アリーガルに Jamia Millia Islamia 大学を共同で創設後、体調が悪化し没した。

¹⁹ マウラーナー・マダニーとどちらもマウラーナーのため、本文では年長のマ

のさらに二人の仲間が捕まり、彼の居場所を明かさなかったために銃殺刑が言い渡された。その二人は刑を受け入れてもマウラーナー・マフムードゥル・ハサンの居場所を語る気はなかった。だがマウラーナー・マフムードゥル・ハサンはこれを容認せず、出頭して捕えられた。その逮捕と同時にマダニー師は釈放された。なぜなら彼に対する告発書類にはそのとき何も書かれていなかったのだから。

偉大なるマウラーナー・マフムードゥル・ハサンとふたりの仲間はジッダ²⁰に移送された。ああ、マダニー師ときたら、仲間にかう言ったのだった——「もしお^{マウラーナー}師匠さまがインドに移送されるなら、私は監獄の外に暮らしても構わない。そこにはあの方のお世話をする者は多くいるから。しかしどこか別の場所に収監されるなら、あの方にふさわしいお世話を続けられるように、私もお供しようと思う」。

インドに送還されないという情報を得ると、師への敬意から、その御足のもとに馳せ参じたいという思いで、いてもたってもいられなくなった。そして政府にまで及ぶ自らの仲間たちに、マダニー師がメッカに残るのは危険であり、必ず当地で何らかの厄介事を起こすだろう、だから彼もマウラーナー・マフムードゥル・ハサンとともに送られるべきだと宣伝させた。この計略は功を奏し、マダニー師もジッダに送られた。その後すべての者がマルタ島に移送された。そこで彼は何年間も監禁され、師の世話をしつづけた²¹。

シムラー会議の際にガーンディーに招聘されて彼はクリップス卿²²に面

ウラーナー・マフムードゥル・ハサンは「大マウラーナー बड़े मौलाना」と区別している。

²⁰ サウジアラビアの都市。

²¹ 1917年2月21日に囚人たちはマルタに移送され、1920年3月20日にマルタを離れた。Metcalf (2009: 34-43)によれば、監獄での生活の詳細を次の手記でマダニー自身が記しているという。Husain Ahmad Madani, n.d. *Asir-I malta* ("The prisoner of Malta"), Deoband: Rashid Kampani.

²² Stafford Cripps 卿 (1889-1952) は 1942 年のクリップス使節団で知られてい

会に行った。そこでは和平と調停の話がされていた。駅で雑誌記者が断りもなく彼の写真を撮り、それがヒンドゥスターン・タイムス紙に掲載された。私はそれを切り抜いて封筒に入れて彼のところに行った。「あなたの写真を撮りたいのです。ご都合のよいときに写真屋を呼びます」

彼が拒みつづけて撮影させてくれないので、封筒を開けて写真を見せた。「もういいです。あなたの写真は持っていますので」それを見て彼はにっこり微笑んだ。それから深刻な表情になって言った——「これは破いてください。人の容姿はすぐ変わります。なぜこんなものを持っているのですか？」。

多くの人々の求めに応じて、彼は自身の師である故マウラーナー・マフムードゥル・ハサンの政治的功績史について、一冊の本を執筆した。それらの偉業にマダニー師は深く関与していたが、その本のなかでは自身について触れないように細心の注意が払われた。そのころ駅で会ったときに私はこれについて苦言を呈した。彼は言った——「自分について何を書くというのですか？」。それから少し間をおいて、「私についてあなたはすでに知っているでしょう」とつづけた。私は彼の方を見て、じっと眺めつづけた。少年でもこれほど純真に話すことはないだろう。彼のような無私無欲を唯一プレームチャンドに見たのみで、ほかの人に見たことはなかった。この無私無欲こそが彼を権力闘争という病に罹患させなかったのである。実のところ、彼は政治家ではなくて ^{サント}聖者 であつた。そう、時代を見とおす ^{サント}聖者 であつた。彼がしばしば人に騙されたというのは、半分正しい。本当

るが、1946 年 3 月－5 月のイギリス政府のキャビネット・ミッションでも中心的な役割を果たしている。当時の会議派総裁マウラーナー・アーザードの自伝 (Azad 1959) によると、ミッションは 3 月 23 日に德里着、5 月 2 日から 15 日までシムラーで会議、会議派メンバーでないガーンディーも招かれている。Azad (1959: 139) の記述から、マダニーが参加したシムラー会議とは、この 1946 年の会議をさしていると考えられる。この情報を提供くださった桑島昭氏に深くお礼申し上げる。

の真実は、こうだ——彼は欺瞞や策略という言葉を想像すらできず、その精神世界は暗い側面とは無縁であった。

宗教対立による恐怖の時代で、その背景となったのが、モスク前での演奏であった²³。自分たちの宗教に対する侮辱であるため、モスク前で楽器を鳴らさぬようにムスリムたちは熱望していた。ある日私は尋ねた——「これについてあなたはどのようなご意見をお持ちですか？」。

彼は言った——「私はムスリム学者ですので、宗教について意見を述べることはできます」。

私は言った——「ええ、宗教的視点でご意見を述べてください」。

彼は言った——「しかし、これのどこが宗教の話なのですか。これは無知でしかない」。

ジンナーは彼を買収しようとし、ある人物がデーオバンドを何度も訪れたことを私は知っている。しかしマダニー師はそちらに顔を向けるどころか、足すら決して向けなかった。彼の言によれば、「ジンナーはイギリス人で、私は生まれながらにしてイギリス人の敵だ」そうだ。

「あなたは一度ジンナーに会ってみればいいのです。彼はこちら側の人間でムスリムたちの利益を望んでいます」と言われると、彼は答えた——「私は黒いイギリス人と白いイギリス人のどちらも大嫌いです。ジンナーは黒いイギリス人です。イギリス人は自分の利益だけを欲して、他人の利益を考えません」。

これにジンナーはたいそう苛立ち、ムスリム連盟の者たちは怒り狂った。アッサムから帰る途中のある駅でマダニー師は、ターバンを外され、罵倒され、さらにほかにも色々なことが起こった。この出来事の直後に私は彼

²³ モスク前の楽器の演奏と宗教観対立については、Sarkar (1989: 80, 196, 232, 233, 236, 302)やガーンディー (Gandhi 1994: 16, 23, 25-28, 35, 37-38)やアンベードカル(Moon 2014: 167, 168, 245, 269, 311-312)も記述しており、この時代に限らず繰り返されていたことが分かる。情報を提供くださった、宮本隆史氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

に会いに行った。その姿を見ると思わず胸がいっぱいになり、握手もせずに私は抱きついた。

マダニー師は何も語らなかった。私のためにお茶を用意させて言った、「これは奉仕の勲章です」と。それでも私が深刻な表情でいると、「ごろつきどもは買収できないと奪おうとします」と言った。「狂犬は吠えたり噛んだりするものです」私の目に映った彼は、その日も普段どおりに静かで落ちついていて、名誉を受けて奢り侮辱されて動揺するような性格の人ではなかった。

ジンナーの真の敵はマダニー師であった。彼の名を聞いたとたんジンナーは自身の敗北を意識した。というのも、この師がいたからこそ、インドの ^{マウールヴァイー}イスラーム学者たちは完全に反ジンナーであり、百戦錬磨のジンナーの前でマダニー師は自分の旗を降ろすことは決してなかったのだから。

彼の人格には獅子のような威厳があり、見知らぬ人をも感化し明るくする特性があったが、人としての最大の魅力はその声であった。まるで洞穴から天国の神の声が聞こえてくるかのような、不思議な甘美さをたたえた声。パンディット・ジャワーハルラール・ネールーの ^{マスターピース}傑作のひとつだ。それは詩人や芸術家の声だが、マダニー師の声には滝と海が見事に融和していた——女性的な優美さと男性的な重々しさが交じり合っていた。

彼は偉大な人であったが、自らの偉大さを意識すらしていなかった。自身のために何ひとつ欲せず、彼の人生における月と太陽は、創造主と母国インドであった。それらのために捧げられた人生であり、彼は献身的な生き方を体現する模範的人物であった。1947 年 8 月 15 日(インド独立の日)に彼は語った——「私の勤めは終わりました。ああ ^{クダー}神よ、今や尊厳をもって、いつでもあなたの足下に私をお呼びください」。

1957 年 11 月 9 日にインド大統領ラージェンドラ・プラサード博士がダーウルル・ウルーム（デーオバンド神学校）を来訪し、師に敬意を表した。大統領と並んで座る彼を見たとき、これは、歴史的人物に対して国を象徴する人物が心からの礼賛を贈っているのだと思った。1958 年 12 月 5 日、

マダニー師はこの世を去った。まるで彼の願いを神が聞き入れて下さったかのように。

ああ ^{クダー}神よ、今や尊厳をもって、いつでもあなたの足下に私をお呼びください。

師の愛しい思い出に、幾十万の ^{サラーム}敬礼！